

<p>ベーシストのジェイ・レオンハートは1980年代初頭からニューヨークのシーンで評判を集め、これまでに数多くのセッションに起用されて、趣味のいいベーシストとしての持ち味を遺憾なく発揮してきた。自身のリーダー作も10枚以上を超えているが、ベーシストということもあってか、実力の割りにきちんとした評価がされていない。日本でも、過去に何枚かが輸入盤に日本語の解説書をつけた形で紹介されているものの、大きな評判には結びつかなかった。</p> <p>記憶する限りでは、今回ここに登場した『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』が、初めての日本制作盤として紹介されるアルバムだ。これまでに蓄えてきた実力と音楽性が漏れなく発揮された内容は、ベーシストがリーダーというハンディキャップを考えても、多くのファンから受け入れられてしかるべきものと思われる。</p> <p>レオンハートは1940年12月6日にメリーランド州ボルチモアで生まれたというから遅咲きだ。地元でプロ・デビューしたのが1950年代末のことで、1960年代から70年代にかけては、マイク・ロンゴ、エセル・エニス、アービー・グリーン、マリアン・マクパートランド、トニー・ベネット、ジム・ホール、バーバラ・キャロル、サド・ジョーンズ=メル・ルイス・ジャズ・オーケストラ、ズート・シムズ、リー・コニッツ、パディ・リッチ、タル・ファーロウ、シルヴィア・シムズ、ジョン・パンチといったひとたちと共演して、着実に真価を発揮してきた。しかし、先にも書いた通り、広く注目されるようになったのは1980年代以降である。</p>
<p>レオンハートは幅広い音楽性の持ち主としても注目すべき存在だ。この作品で聴かれるように、オーソドックスなジャズのプレイが彼のメインである。しかしそれ以外にも、シンガーとして活躍することもあれば、フュージョン系の演奏でその名前を見つけることもある。その器用さが災いして、決定的な評判に繋がらないという不運もあった。</p> <p>しかし彼は、基本的にレイ・ブラウン直系の、ベース本来のナチュラルで濃厚なサウンドの持ち主だ。1960年代には、そのブラウンから直々にレッスンを受けたこともある。それだけに、今回の作品を彼へのトリビュートとしたのも納得がいく。そして、ブラウンと言えば、切っても切り離せない関係にあるのがオスカー・ピーターソンだ。</p> <p>そのピーターソンは、ジャズ史に残る名トリオを率いてきた。始まりはブラウンと組んだデュエットである。それが、やがてギタリストを迎えたトリオに拡大され、最終的にはギタリストが抜けてドラマーに交代し、一般のトリオ編成になった。</p> <p>したがって、ピーターソンが最初に結成したトリオ編成を踏襲しているのがここでのレオンハートだ。彼と組むのは、ピーターソンから後継者に指名されたピアニストのベニー・グリーンと、名テナー奏者のアル・コーンを父に持つギタリストのジョー・コーンだ。この3人が織り成すトリオ・ミュージックが実に面白い。大きくフィーチャーされたレオンハートのプレイもさることながら、三者三様の丁々発止としたやりとりが聴けるのもこの作品の魅力である。</p>
<p>演奏紹介</p>
<p>1. ホエン・ライツ・アー・ロウ</p> <p>アルバムのオープニングを飾るのは、アルト・サクソ奏者にして作・編曲家のベニー・カーターが1936年に発表したロマンチックなナンバー（作詞はスペンサー・ウィリアムス）。自身も何度か録音しているが、マイルス・デイヴィスを始めとして多くのミュージシャンやシンガーがとり上げたことからスタンダードの仲間入りを果たした。ここでは、グリーンがミディアム・テンポに乗ってゆったりとした風情でテーマ・メロディを繰る。その後はコーンがオーソドックスなスタイルでギター・ソロを披露し、グリーンはシングル・ノートを中心にしたソロ、そしてレオンハートのアルコによる濃厚なプレイへとバトンタッチされていく。</p>

<p>2. 君住む街で</p> <p>1950年代はミュージカルの黄金時代で、ジャズ・ミュージシャンもヒット・ミュージカルのカヴァー集を発表する機会が多かった。とりわけ高い人気を誇っているのが、オスカー・ピーターソン・トリオによる『マイ・フェア・レディ』（ヴァーヴ）だ。これはその中の1曲で、ピアノ、ギター、ベースがバランスよく配された演奏になっている。ピーターソンのトリオは、彼のワンマンぶりがいい意味でも悪い意味でも特徴になっていた。しかしこちらのヴァージョンでは、全員がほどよく絡むことで、3人にしかできないトリオ・ミュージックが表現されていく。</p>
<p>3. スカイラーク</p> <p>ジョニー・マーサー（作詞）と、「スターダスト」を書いたホーギー・カーマイケル（作曲）が1941年に発表したラヴ・ソング。ほのぼのとした歌詞が受けて、男女を問わず多くのシンガーにとり上げられてきた。もちろん器楽曲としても人気で、ピーターソン・トリオが残した演奏も名演の誉れが高い。ここではグリーンがしっとりとした雰囲気で美しいメロディを歌い上げていく。そのバックを最高のサポートで決めたレオンハートが、当然のようにテーマが終わるとソロをとる。そしてそのままコーンのプレイに移って、スインギーなテンポに変化し、それがグリーンはソロへと繋がっていく。それぞれのソロは短いですが、その移り変わりが自然で、そこも聴きどころだ。</p>
<p>4. ノー・グレイター・ラヴ</p> <p>1936年に作詞家のマーティ・シムズと作曲家のアイシャム・ジョーンズが共作した、恋人を手放して絶賛するラヴ・ソング。原曲はバラードだが、アップ・テンポで演奏されることも少なくない。レオンハートのトリオはミディアム・テンポを採用し、グリーンがノーブルにテーマを演奏したあとは、レオンハート、コーン、グリーンはソロが続く。とくにシングル・ノートでばりばりと弾きまくるグリーンが圧巻だ。</p>
<p>5. ザット・オールド・フィーリング</p> <p>リュー・ブラウン（作詞）とサミー・フェイン（作曲）が書いたラヴ・バラードで、1937年の映画『ウォルター・ワンガーズ・ヴォーグス・オブ1938』の主題歌として発表された。しかし大きな評判を呼んだのは1947年に吹き込まれたフランク・シナトラのヴァージョンで、その後は映画『白いドレスの女』な</p>

<p>どでも使われている。それを洒落たタッチで聴かせるのがグリーンだ。続くコーンの乗りもスインギーな魅力を横溢させたものだし、小技を巧みに用いたレオンハートのソロも楽しい。</p>
<p>6. ジャスト・イン・タイム</p> <p>1956年のヒット・ミュージカル『ベルズ・アー・リング』の主題歌として、ベティ・カムデンとアドルフ・グリーンが作詞を、ジュール・スタインが作曲を担当したスタンダード。ここではフォーガの対位法を思わせるパートをイントロ代わりにして、それが終わるとグリーンを中心にしたテーマ・メロディが演奏される。ご機嫌なタッチは尊敬してやまないピーターソンを彷彿とさせるもので、続くコーンのプレイも快調そのものだ。その後に短いレオンハートのソロを挟み、対位法的なアプローチのパートに戻って演奏は幕を閉じる。</p>
<p>7. アロン・トゥゲザー</p> <p>ハワード・ディーツ（作詞）とアーサー・シュワルツ（作曲）のコンビが1932年に初演されたヒット・ミュージカル『フライング・カラーズ』のために書き下ろしたオリジナル。ミュージカル公開時には爆発的なヒットに結びつかなかったものの、しばらくしてからジャズ・ミュージシャンがとり上げるようになった。ここでは、レオンハートのアルコがテーマを演奏する。フレーズの緩り方や低音を強調させる手法に、ブラウンの影響が認められる。その上で、立派に自分のスタイルにしているところが流石だ。その後はグリーンがエキゾチックなムードを表出させながらテーマ・メロディを演奏し、そのままいきなり素早いパッセージを連続させるソロへと入っていく。これも出色の出来映えである。</p>
<p>8. フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン</p> <p>この曲は、1962年にピアニストのジョー・ハーネルがボサノヴァ調のアレンジで演奏してからスタンダードのひとつになった。しかしパート・ハワードが作詞・作曲したのは1953年のことで、ワルツ調で演奏されたそのときは「イン・アザー・ワーズ」というタイトルがつけられていた。そのままではほとんどヒットしなかったこの曲を、改題してアレンジまで変えたハーネルの功績は大だ。レオンハートのトリオは、グリーンはゴージャスな音使いを中心にしたテーマ・メロディからして、ピーターソン・トリオばりの演奏を披露する。</p>
<p>9. アイヴ・ガット・ザ・ワールド・オン・ア・ストリング</p> <p>1932年にニューヨークでヒットしたレビュー『コットン・クラブ・パレード』のために、テッド・ケーラー（作詞）とハロルド・アーレン（作曲）のコンビが提供したナンバー。ジャジーなメロディが受けて、直後から多くのジャズ・ミュージシャンやシンガーがとり上げるようになった。それをグリーンが力強いタッチで演奏していく。ところどころにファンキーなフレーズを散りばめるのも効果的だ。ソロはコーン、グリーン、レオンハートの順で、各人が持ち味をしっかりと聴かせてくれる。</p>
<p>10. ドリーム・ダンシング</p> <p>コール・ポーターが作詞・作曲したこの曲は、知るひとぞ知る隠れた名曲だ。それをとり上げたあたりにセンスのよさが窺われる。美しい響きを強調したグリーンはプレイが印象的だ。そのバックでの確なサポートと叙情味に溢れたソロを聴かせるレオンハートもヴェテランの味を醸し出す。</p>
<p>11. サム・アザー・タイム</p> <p>ビル・エヴァンスが得意にしていた美しいメロディの曲で、1944年にベティ・コムデンとアドルフ・グリーンが作詞し、大御所のレナード・バーンスタインが作曲した。通常はバラードで演奏されるが、レオンハートが主導するテーマはややスインギーな興趣を含んでいる。その後はグリーンは張り切ったプレイが演奏を盛り上げ、複雑なフレーズを中心にしたレオンハートのソロへと続く。</p>

[[c]WINGS 03122074 : 小川隆夫/TAKAO OGAWA]

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on July 23 , 2003.
Engineered by James Farber. Assistant : Aya Takemura.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover : © Cecil Beaton photograph courtesy of Sotheby's London / G. I. P. Tokyo. Photos by John Abbott.
Designed by Taz.
Benny Green appears courtesy of Telarc Records.

<p>2. 君住む街で</p>
<p>3. スカイラーク</p>
<p>4. ノー・グレイター・ラヴ</p>
<p>5. ザット・オールド・フィーリング</p>
<p>6. ジャスト・イン・タイム</p>
<p>7. アロン・トゥゲザー</p>
<p>8. フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン</p>
<p>9. アイヴ・ガット・ザ・ワールド・オン・ア・ストリング</p>
<p>10. ドリーム・ダンシング</p>
<p>11. サム・アザー・タイム</p>

©© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

<p>2. 君住む街で</p> <p>1950年代はミュージカルの黄金時代で、ジャズ・ミュージシャンもヒット・ミュージカルのカヴァー集を発表する機会が多かった。とりわけ高い人気を誇っているのが、オスカー・ピーターソン・トリオによる『マイ・フェア・レディ』（ヴァーヴ）だ。これはその中の1曲で、ピアノ、ギター、ベースがバランスよく配された演奏になっている。ピーターソンのトリオは、彼のワンマンぶりがいい意味でも悪い意味でも特徴になっていた。しかしこちらのヴァージョンでは、全員がほどよく絡むことで、3人にしかできないトリオ・ミュージックが表現されていく。</p>
<p>3. スカイラーク</p> <p>ジョニー・マーサー（作詞）と、「スターダスト」を書いたホーギー・カーマイケル（作曲）が1941年に発表したラヴ・ソング。ほのぼのとした歌詞が受けて、男女を問わず多くのシンガーにとり上げられてきた。もちろん器楽曲としても人気で、ピーターソン・トリオが残した演奏も名演の誉れが高い。ここではグリーンがしっとりとした雰囲気で美しいメロディを歌い上げていく。そのバックを最高のサポートで決めたレオンハートが、当然のようにテーマが終わるとソロをとる。そしてそのままコーンのプレイに移って、スインギーなテンポに変化し、それがグリーンはソロへと繋がっていく。それぞれのソロは短いですが、その移り変わりが自然で、そこも聴きどころだ。</p>
<p>4. ノー・グレイター・ラヴ</p> <p>1936年に作詞家のマーティ・シムズと作曲家のアイシャム・ジョーンズが共作した、恋人を手放して絶賛するラヴ・ソング。原曲はバラードだが、アップ・テンポで演奏されることも少なくない。レオンハートのトリオはミディアム・テンポを採用し、グリーンがノーブルにテーマを演奏したあとは、レオンハート、コーン、グリーンはソロが続く。とくにシングル・ノートでばりばりと弾きまくるグリーンが圧巻だ。</p>
<p>5. ザット・オールド・フィーリング</p> <p>リュー・ブラウン（作詞）とサミー・フェイン（作曲）が書いたラヴ・バラードで、1937年の映画『ウォルター・ワンガーズ・ヴォーグス・オブ1938』の主題歌として発表された。しかし大きな評判を呼んだのは1947年に吹き込まれたフランク・シナトラのヴァージョンで、その後は映画『白いドレスの女』な</p>

^[1] [[c]WINGS 03122074 : 小川隆夫/TAKAO OGAWA]